

報告者リプライ

植田：ではまず、今日の報告者の方々、西川さんから順に、リプライをいただければと思います。よろしくお願いします。

西川：西川です。コメントの方、お二方、どうもありがとうございました。まず、順番にお答えしていこうかなということですが、初めに、三浦先生からいただいたコメントのひとつですが、これは質問というか、Michel Foucault で都市研究を見ていくっていうのは、なかなか難しいところがあるっていうお話でして、それに対して何かいいアイデアはないだろうかというところでした。たしかに今回の発表では、都市社会学の部分に関しては削っていて、何で削ったかっていうと、もちろん通り一遍の批判は Foucault の立場からあって、たとえばマルクス主義とかに対する批判の方法はあるんですけど、ただ、それをちょっと言っても、私自身もそれほどちゃんとマルクス主義を学んでいないので、あんまり言うのもあれかなと思ったので、今回、発表の段階では削ったということです。ただ、日本のなかでいうと、もちろん吉見俊哉先生なんかは、比較的早い段階から記号論的な都市の解読みたいなものの限界について述べられていて、当然、マテリアルな次元を含めて考える必要があるんじゃないかっていうようなことは、おっしゃっていたと思います。ただ、私が見る限りでは、その後、あまりその論点は深められなかったのかなというところがあって、都市研究自体も、やはりその後、たとえば北田暁大さんが引き継いだとしても、ネットと申しますか、情報空間の方に行っている気がします。通信をインフラだとすれば、それも含めていろいろ考えようはあるんだと思うんですけども、ただ、都市のマテリアリティみたいな次元は、あまりそれ以降深められなかったのかなという気はしていたので、ちょっとそのあたりで、統治性という観点からものが言えるかなということで、ひとつ見ていっているということがあります。

じゃあ実際に、日本の都市を分析するにあたって、歴史研究にならざるをえないのかというところですけども、そういうわけではない、というところがありまして、ひとつはもちろん、今回ちょっと出ていましたけれども、ネオリベとインフラの話っていうのは相性がいいので、こういった観点から分析していくことはできるだろうというのがあります。つまり、現代的な問題として都市を切っていくっていうことは、十分可能だろうと。そのときに、いろいろ参考になるところがあるかなと思ったのは、ひとつは、今日はあまり話に出てこなかったけど、難波さんの話でちょっと出てきましたが、国境を越えるインフラの話っていうのは、ひとつあるのかなと思っています。島国なので日本だとなかなか見えにくいですけども、特にヨーロッパだと、国同士を結ぶ鉄道の話であるとか、国境を越えるインフラの研究っていうのは、わりと蓄積があったりするので、そういった観点から私も一度、戦前日本を切ってみようかと思って、やってみたことがあったんです。たとえば戦前だったら、弾丸列車っていう構想が立てられていたりする。つまり、日本から中国まで、東京発北京行っていう鉄道が作られようとしているとかですね、そういうこともありました。あと、都市計画という意味では、これもすごくよく知られているところですけども、戦前の段階だと、むしろ満州の方がすごく衛生的な都市が作られている。だから、日本よりも全然水準が高い都市が作られているということがあって、それを逆輸入するかたちで、日本にあてはめていくっていうところがあったりする。で

すので、狭い意味での近代日本という限定を外して考えていくと、いろいろ現代においても見えてくるのかなどということは、ひとつ思いました。

それがちょっと後ろ向きだとすると、もっと将来のことを考えてみるというのもひとつかなと思うところがあって、これも私自身ちょっと興味があるんですけども、今後都市っていうのを考えていくうえで、都市の縮小っていうか、逆にたたんでいくっていう面も見えてくるのかなと。つまり、先ほどちょっと言いましたけれども、ローカル線が廃線になっていくことの意味って言ったらいいんですかね。それまで通じていて、ネットワークのなかに組み込まれていた地域が、そこから切断されてしまうというところがあるんじゃないかと。つまり、インフラっていう観点から見えていくと、都市の縮小っていう話を、ひとつできるんじゃないかなと感じました。実際やっぱ、地方とかに行くと、これはあくまでもニュースを通してしか知りませんけれども、予算的に降りないので道路の修復ができないという話がちらほら出てきていて、じゃあどうするかという、住民の方が道路を作るっていう、そういう動きもあったりするようなんです。そうした観点からいくと、先ほど人類学の方面ではそういうのがあるよっていうのは教えていただいたんですけど、これ、今後の日本を見ていくうえで、そういう視点っていうのは、もしかして見えてくるんじゃないかと。つまり、道路といったモノについて接していくって言ったらいいんですかね、一般住民が道路を作っていくっていう話も、ひとつ何か見えてくるんじゃないかなというのが、ちょっと感じたところですかね。

あと、いくつかあったかと思うんですけども、ちょっと先に、難波さんの方に行きたいと思えます。おっしゃっていることはすごく良くわかりました。人類学でインフラ研究がよくあるっていうのは、特にマンチェスターの方ではある意味すごく有名なので、私もいろいろ読みだりしてはいて、Penny Harveyのものとかも読んでんですけども、私自身はあんまりそこまで惹かれなかった部分があって。何でだろうというのは考えたりしてたんですけども、先ほどあったように、たとえばミリュウという概念を使ったところで、インフラってあんまり見えないんじゃないかっていうところは、たしかに、その通りかなというところはあります。けれども、ただ一点、何で私が統治性をやろうと思ったかっていう理由にもなるんですけど、先ほど、いわゆるホームレスを排除する環境管理型っていうお話があったと思うんですけども、日本で統治性というか Foucault の話が入ってきたときに、最初にあれが結構出てきたんじゃないかなと思ってます。情報管理とか、あるいは環境管理型権力っていう名前が付けられて、たとえばホームレス排除の椅子の話であるとか、マクドナルドの椅子の話ですよ。そういうのが出てきたときに、ちょっとまずいんじゃないかなと思っていて、Foucault がもうちょっと議論していた繊細さみたいな部分が奪われたんじゃないかなっていうところがあったと。で、その繊細さっていうのが何かというと、先ほど言ったように、物質性と、それによって浮かび上がってくる人口、とりわけ集合的な人間っていうところですけども、それとが、もっとぐっちょりしてるって言ったらいいんですかね、うまいこと表現できないんですけど、こう、ねっとりしたなかで浮かび上がってくるっていう、その繊細さみたいなものが失われるのかなと思っただけです。

難波：露骨すぎってことですか。

西川：特に、マクドナルドの椅子とかの話、たとえば大澤真幸さんとか東浩紀さんとか。あれって個人の身体じゃないですか。Foucault が言ってるのは、もちろんそういう面もあるけれども、もうちょっと集合的な主体性って言ったらいいんですかね、ここで言うところの人口なん

ですけれども、そうした話をしたかったんじゃないかな、というところがあったので、日本国内での Foucault の生権力、あるいは環境管理って言われているところを修正する必要があるかなと、したいなというのがあって、敢えてこういう統治性っていうのに踏み込んだっていうのはあります。

あと、もう一点、すごく重要な点をおっしゃっていて、たしかに人類学だと、モノとヒトとの境界線が無くなってきているっていう捉え方、すごく魅力的だし、面白いなとは思っています。実際、そう考えざるを得ないというか、モノの力って言ったらいいですかね、そうしたものを考える必要があるときはあって、たとえば放射線の話でもいいですし、私のやってることでいうと、紫外線がそうなんです。紫外線って、人間のスケールとは全然違う水準で影響を与えてくるものなんです。たとえば皮膚がやけるとか。なので、そういった人間スケールでは測れないところを見る、しかもそれが、こっちは関係なく、否応なく向こうから作用してくるみたいな現象を考えると、やっぱりモノの力とかがあってというのは触れたいなとは思っています。けれども、ただ先ほども言ったように、迷ってるところはあって、それは何かというと、Foucault と Gilles Deleuze の間には、かなり大きな差があります。で、今、Actor Network Theory とか Deleuze=Guattari に行ってしまうのがいいのかどうか。つまり、人間中心主義を否定して、モノっていう話をするのはたしかにいいんだけど、ただやっぱり、人間であるとか、言語の水準っていうのは、やっぱりどこかでちょっと残しておくべきなんじゃないかなっていうのが私の立場、今のところの私の立場です。言葉とモノとの関係性の複雑さを、もうちょっと Foucault に拠って、ねっとり考えたいなっていうのが私の立場ですね。なので、インフラの人類学ってすごく面白いですし、私も魅力的には感じているんですけども、そこに踏み込めなかったっていうのは、そういう理由があるというところですかね。とりあえず、以上です。

岩館: コメントありがとうございました。まず、三浦さんの方から答えていきたいと思えます。モノ性のことについては、僕も、三浦さんが言いたいことを言ってくれたかなというふうに思っています。エージェンシーというより、モノが何らかの力をもつ、あるいは何らかの形で作用するというのを、これまで社会学や学知が、あまり捉えきれていなかったのではと思っています。災害というのは、まさにそのとおりですよ。僕は水道のことを考え続けているのですが、水は、人間がコントロールできているようであり、実はできないっていうことです。東京都水道局が「こうやって管理しています」とは言っているんですけども、でも実際には、どこにどこの浄水場の水が流れ込んでいるかは、インフラ・テクノクラートであっても、実は把握しきれていない。そのことは、モノのモノ性たるものの象徴なのかなって思っています。では、マテリアリティが統治においてどう効いているかに関しては、僕自身の力不足で、まだ論文には書ききれてないのかなって思いました。具体的な分析についても、まだまだ分かりにくいのはそのとおりで、水道というインフラ・ネットワークが不安定化して再安定化していくプロセスを、もうちょっと丁寧に見ていかないといけないと思っています。

「新しい介入主義」が、ここにどう効いてくるのかに関しては、リスク管理っていうのが、災害を経験した後の水道インフラにとっては、やっぱりすごく大事になってきている。リスクをどれくらい予測するか、あるいは計算可能なものにするかっていうことで、さっき言ったモノも含めて本来インフラは予測不可能なだけで、予測可能な形にして、あるいは予測可能であるというふうな枠組みを作って、それに基づいて資源配分していったり、予測をしていくっていうその次元で、すごく争いだったり、焦点が移ってくる。こうした点で、「新しい介入主義」みたいなものが問題にしてきたところの論点が入ってくるのかなと、思っています。

す。

それから難波さん、コメントありがとうございました。まず印象に残ったのは、3.11 後の近代科学の揺らぎです。最初、僕も論文書いている時に、市民団体がガイガーカウンターを持ち出して、安定化したネットワークを不安定化させている、あるいは、そこには完全には収まりきらないんだってという論調で考えていたし、そういうふうには報告しました。ただ、最後の最後で、モノのもつ人間の意図には収まりきらない部分っていうのを持ち出したのは、今日の報告を準備しているなかで、モノを管理し測定しようとする点で、同じ地平にあるのかなと思いついたからでした。その意味では、こうした市民の測定活動も安定化に寄与していると言えなくもない。ただ、市民による測定活動は、やはりそれは必要だし、もっともっとやんなきゃいけないと一方では思うんです。国家やテクノクラートといったパワフルなアクターたちが、「安全」の基準なんかを定義していくことに対して、科学に拠りながら対抗していく言説を出していくことはもっともっとやんなきゃいけない。運動のレベルにおいてそうなんだろうと思うし、マテリアリティの政治というときには、そのこと自体が大事だと思います。と同時に、モノの予測不可能性みたいなものに立脚した形で、別の議論を同時に立てていく。その意味で、二重の実践というか政治性というか、そういうことを今日の準備をするなかで考えるようになりました。なので、難波さんが言ってくださったように、僕もむしろ、水道に関しては、ハイパー近代がどんどん強まったと思っています。3.11 の後、「東京水」みたいなものがどんどん作られて、東京の水はいかに安全かっていうキャンペーンがすごく張られていく。東京の水道を海外に輸出しようみたいなことも含めて、徹底的に近代科学を押し進めていく力の方が、むしろ強化されたと思えます。そのことと、自分たちの身を守るためにガイガーカウンターを持つといった、使えるものは使っていく実践の動きとは、対立していく部分と、相補的になっていく部分があることに注意が必要だなと、あらためて思いました。

最後に、誰にとってもインフラかっていうのは、今回あまり言えなかったんですが、「社会と基盤」研究会内部では結構議論をしてきたことでした。つまり、「東京」の「インフラ」の「危機」といった話を繰り返し強調したのは、そういう意味合いがあって、東京といっても近代日本社会のキャピタル・シティたる「東京」、東京の東京性みたいなものを議論したいと思ってきました。電車はいつでも動いていて、ネットワークにはすぐにつながり、水道は蛇口をひねれば出る、あるいはミネラルウォーターはすぐ手に入る。そういうことがあたかも常態かのように思わせていく、そういう力。かつての言葉で言うと「都市イデオロギー」なのかもしれないですが、そういったものが「壊れ」て「回復」していく過程や動きを、この論集自体はなんとなく念頭には置いているんだけど、たぶんそこまで表現しきれていない・・・

植田：たしかに、その「東京」っていうところは、うまく表現しきれていないですね・・・

岩館：ですね。そういうところは、ちょっと聞きながら思いました。それ以外も、この論集が持っているバイアスとか限界とかを気づかせていただきました。本当に触れていただいてありがとうございました。ひとまず、こんな形で応答したいと思います。

森（元）：三浦さんの質問で、Whitehead と Latour、どんなもんかつちゅうことですよ。もし Whitehead 原理主義者の立場に立てば、Latour なんか馬鹿だろうということになると思います。Latour の言ってることなんかどうでもいいわいと。ただ、これは悪しきオタクな哲学研究っていう観点からです。みなさん Foucault とか Deleuze って言っていましたけど、もし哲学研究者が

Foucault を哲学として研究する場合、たとえば bio-pouvoir、生権力っていう概念を研究するとき、それこそ 1960 年代のあの本のなかでの概念しか扱わないと思います。だから、その著作から外に生権力を連れ出して、今現在私たちの生活は生権力に満ちてるでしょっていうことは、悪しきオタク哲学者は絶対に言いません。そういう意味では、ダメです。だけど、さっきも言いましたが、溝にはまっちゃったら面白い。だから、別にいいんじゃないのと、僕は思います。だって、これだけ生権力なんていう概念が世界中に広まったのって、すごいことですよ。今ここにいるなかで、Foucault という固有名が出てくる人口密度の濃さといったら、すごい。だからなんか、別にいいんじゃないの。だから、その観点をとれば、Latour もいいんじゃないの。あと、Whitehead 自身は、Latour や Stengers さんが論じることを、おそらく喜ぶと思います。なぜなら、Whitehead がいた時代が、先ほどもちょっと言ったかもしれないですけど、19 世紀。Latour もなんかよく、私たちは近代人じゃないって言ったり、たぶん Latour も近代人じゃないんだと思う。もちろん 19 世紀は近代なのかどうなのか、という視点もあるとは思いつつ、まだ 19 世紀って、今みたいな専門分化が激しくない。だから、ああいうことが言えちゃうんじゃないかなという気はします。で、Actor Network Theory (ANT) ってどんなものなのかっていうのは、正直言いますと、よくわかりません。なんか、みんな使えていいんだったら、いいんじゃないですかという以上のことは言えない。それが実証研究としても妥当性があるもの、検証されうるもの、社会学の STS でも ANT の理論のなかで、ある一定の基準を満たして、それが valid ですよと言っているものだったら、いいんじゃないのって思います。ただ、僕は分かりません、その辺。

あと、もう少し、Latour の哲学的な構図と、Whitehead の構図の違いについてですね。さっきもちょこちょこ話題になっていたと思うんですけども、モノ性とモノの力とモノの主体。Latour の場合は、僕も Latour 全部読んだわけではないのでわかんないんですけど、たぶんそれこそ、さっきもおっしゃっていたように、モノに左右されるとか、そういう側面があるだろうなと思っています。その一方で、Whitehead では、人類学では否定されてしまっているかもしれないけども、全部に主体があります。これは、さきほど西川さんがおっしゃっていたように、彼、もともと物理学者だったので、分子レベルとかでモノを考えたりします。そのレベルで、たとえばこのペットボトルも、もちろん意識なんかはないんです。で、人間にも意識があるかっていうと怪しいぞと、Whitehead は言います。であるにもかかわらず、主体がある。それはどういうことかという、もう少し、ほんと即物的なレベルですね。だからこのペットボトルも、動いてないように見えるけど、分子レベルで見たら、むちゃくちゃ動いてるわけですよ。ちょっとずつちょっとずつ劣化していく。このペットボトルさんの主体があつて、俺劣化したいって劣化してるわけですよ、わかんないけど。

難波：うーん、微妙・・・

森(元)：私たちも、劣化したいって劣化してる。アンチエイジングなんかダメです。そのレベルを、Whitehead は主体と言います。一応、拙著¹のなかでは、主観と主体っていう言葉を実は使い分けていて、主観っていうのは、いわゆる一般的な人間の主観ですね。その一方で、人間もマイクも主体ですよって言うときは、同じ subject だけど、僕の場合はですね、ちょっと訳し分けて使ってます。

¹ 森元齋，2015，『具体性の哲学——ホワイトヘッドの知恵・生命・社会への思考』以文社。

拙著でも語ってるんですけど、人間だけ意識はあるので、たとえば数学の問題が解けるとか、ロジックが解けるんですよ。真偽が判定できる。ただ、この人たち（ペットボトル）は、あんまりできない。もちろんそれは、科学の側面で切り取ったら、真偽が確定できるような部分があるのかもしれないけど、だいたい分子レベルのものっていうのはランダムな動きをするし、量子力学、量子レベルのものは不確定なので、従来の仕方では真偽が確定できない。で、私たち人間も、実はほとんどそういうふう動いている。僕も今、何喋ってるのか分からないで喋ってます。大方、ほとんどの領域において、そういった意味で主体性を持っていて、いろんなことを出したり引いたり、飯食って糞してる。結構即物的なレベルでのことを、Whitehead は語っています。そんな即物的なレベルのものにも力があって、なおかつその力でいろんなことするのを *prehension* という言葉で語っています。抱握と翻訳しました。その一方で、人間がすごい抽象的なレベルで、否定ができますよとかいうのは、*apprehension* ですね、*ap* が頭についています。で、*apprehension* しているのは、だいたい論理学者か数学者ぐらいしかいないんじゃないか。あと、コンピュータぐらいですかね。その意味で、Whitehead からすればコンピュータは意識があります。だから、Latour とはちょっと、ちょっととか大きく違う。それと、難波さん、僕に何か質問しましたっけ。

難波：質問しましたっけ。

森(元)：してなかったっけ。自分で書いたメモが汚い字で読めません。

難波：なんだっけ。あ、ガイガーカウンターを私が持っても、さっきお話ししてたみたいな、Whitehead が言うところの *wisdom* は得られないんじゃないのっていう、まあ、質問っていうかなんていうか。

森(元)：これは一個の事例なんですけど、それこそちょっと前に書いたことがあります。『被曝社会年報』だったか『現代思想』か。面白いのが、ガイガーカウンター持ってる私たちって、放射線に関してズブの素人じゃないですか。で、よくわかんないけどピーピー鳴ってるからやべぞ、みたいな感じなんですけど、それで、とりあえず楽しいから測る。で、やっぱ、おとん・おかんが多い。子どもを守るという観点です。で、かれらは道路、特に子どもが通学路で歩く歩道の段差にある黒い藻みたいな、黒いゴミみたいなものに着目します。藍藻類です。あれ測ったらやばかったんですよ。で、なんかやべぞつつって、みんな何か名前分かんないから、それに名前を与えたんですよ。「黒い物質」。これはもう、詩です。これに対して専門家が、これは藻の一種で、普段はカリウムを摂取して大きくなるんだけど、セシウム摂取して生物濃縮されて、ものすごい放射線量を発してんだよと。これはだから、ガイガーカウンターを持ってる人たちも、科学リテラシーに貢献したわけです。私たちのリテラシーを高めるのに貢献した。だからこれは、ちょっとずつしか進まないんだけど、そうやってちょっとずつ、さっきの話じゃないですけど、我々素人が科学的知識をきちんと得ていくことって、すごい時間かかると思うんだけど、僕はそういうことがあって、ちょっとずつ進展していくと思っています。その意味でも、科学は全然否定されるべきことではない。Whitehead の立場もそうです。だから、科学も取り込んだうえで、少しずつ民衆のレベルでも、いわゆる具体的な生活の観点から、少しずつ科学を得て、科学をある意味で進展させていくようにゆくゆくはなるんじゃないか。何の話だったっけ、忘れちゃったけど。そうそう。その意味では、知恵の進展です。

難波:そこで格差っていうのはあるんですか。やっぱり、科学的真実みたいなものを探求していくってこと。しかも溝にはまらない形で。ていうか、溝にはまらなくても、科学的真実ってのに到達できるようなものとして想定されている科学的真実みたいなものがあるって感じなんですかね。

森(元):さっきおっしゃってたハイパー近代主義じゃなくて、ハイパーハイパーハイパー近代主義みたいなのは、Whitehead も、これ Deleuze もそうなんですけど、ある。それもある一方で、ハイパーハイパーハイパープレモダン主義みたいなのが、一緒になっているのが、Whitehead の場合。だから、彼にとって望ましいのは、ハイパープレモダンな状態とハイパーモダンな状態が渾然一体となっている。

難波:それがさっき言ってた平衡状態なんですか。

森(元):そう。ちょっとずつ進展していくことが望ましいんじゃないか。進展、進歩みたいなのは言うんですけど、終わりはたぶん無い。Whitehead の場合、面白いのは、始まりも無い。なので、ずっとずぶずぶの世界。これはまたちょっと別の領域での Whitehead の話。

森(啓):ほとんど忘れかけてるんですけど、一応。三浦さんの質問で、自衛隊がインフラをどう作り上げたのかっていうレベルの話は、自分が今すごい面白いなと思っていて、たしかに重要だなと思っています。この書き物、僕が初めて禁欲的に書いた論文なんですけど、みんな避けたくなる事象だなと思っていて、で、書きながら、なんで避けたくなるのかなってところも、同時にいろいろメタ的なレベルで考えてるところはあって、やっぱりそこは、自分自身が、どう考えても自由主義的なものに裏付けられた社会的な教育を受けたからなのかなって思うんですね。たとえばこれが、もう少し抑圧体制の軍事主義的な政府のもとで自分自身が教育を受けてたらどう考えるかと考えると、おそらく違うだろうと。でも、こういう軍事的なものを、ある種、避けて通っていくような思考自体が、自由主義的な統治体制のなかで非常にうまく機能していて、だからこそ、特に日本の戦後を歴史社会学的に見ていくと、そういう部分があるなって思います。なんか、国家の戦争形成、war making の枠組みのなかに、もう軍事的なものを正面から捉えないでいいみたいな、捉えたらちょっときつみみたいな、そういう心性みたいなものが集散的に作られているのかなっていうのがあるので、それは今後の課題だと思いました。

やっぱり、自衛隊がインフラをどう作り出したかって、基本的にやってるのは初動。直後に、でかいブルドーザーでガッガッガレキを取り除いたり、壊れた道を作り直したりって、そういうのが基本的には主要な作業で、一回道が導通した後に、コミュニティがもっていた電気インフラだとか、水道インフラですよ、あるいは食料インフラってものを中心に担ってきたわけで、石巻と女川に何回か行きましたけど、そういう空間だったわけです。それは、これからの課題にしたいなというのがあります。

もうひとつは警察。軍隊だけじゃなくて、軍事的合理性のなかには警察的なものとか、軍事的合理性自体はたぶん軍事的なものって言うんですけど、それが警察組織とか資本のなかにもやっぱり編入してるっていうのは事実で、特に欧米の都市研究だと、都市における警察の役割がどんどん出てくると思うんです。都市人口がますます増加するグローバルな都市化の展開において、都市の軍事化、あるいは軍事機構の都市化という文脈が、避けられない

現実を構成しつつあります。この新たな都市の軍事化、都市をめぐる軍事化については、Stephen Graham の著作²が鋭い批判を展開しています。

今、やはりアメリカのなかで、特に湾岸戦争以降、1992年以降に問題になっているのは、アメリカの軍事費は、だいたい日本の国家予算と同等くらい、ちょっと多いのかな、今だとちょっと少ないくらいなんですけども、そのくらいの予算があって、そのうちの3割は海外の多国籍企業に流れているんですね。なぜかと言うと、もともと国内に主要な傭兵の会社を持っていたアメリカの大きな軍事会社のブランチが、イラク戦争とかアフガン戦争のなかで現地民をゲームで殺したりとかするわけですね。それが非常に国内世論で問題になった時期があって、2005年くらいから2007年くらいまであるんですけど、この時期に、みんなが知らない国にヘッドクォーターを移し始めるんです。で、結果的にはペンタゴンの予算って、そういうところに流れて、国防予算の3割強ですね、36-37%ぐらいが、そういう海外の多国籍企業に流れていると。アメリカの軍事予算の民営化と、多国籍企業のアメリカ外流出の問題については、David Vine の研究³を参照して頂きたいです。こういう会社が、基本的に、アメリカ国内の機動隊が持つ装備とかを開発している会社でもあるので、そういう形で、ある種の資本を媒介としたブーメランのものとして都市に返ってくるってのは間違いないだろうし、このままいくと、おそらく日本もそういう機制になっていくだろうと思います。それはこれから、もうちょっとちゃんと考えていきたいです。

これは、難波さんの方にもつながる話だと思ったんですけど、もうひとつは都市研究。都市の研究で考えてみると、たとえば Actor Network Theory (ANT) とか、都市研究でいう assemblage 学派、新都市社会学の人たちがそう総称して批判する学派があって、植田さんの冒頭の報告にあったと思うんですけど、やっぱり主要な違いっていうのがいくつかあって、そのなかで一番面白いなと思ったのは、新都市社会学とかマルクス主義的な構造主義は、基本的には、構造自体が抱える内部の矛盾から変革主体が現れるっていうところを捨てないっていうところなんです。要するに、変革主体は内部に既に矛盾として存在するということなんです。この観点から、Actor Network Theory は外部との接続のなかでしか変革の余地がないんじゃないかと、そこに関してはどう考えるのか、それに対して答えを出してないんじゃないかっていうレベルで、批判理論は ANT を批判するわけですね。この点に関しては Neil Brenner たちが、包括的で緊張感のある論争の整理⁴をしています。それは組織レベルの話なのか、制度レベルの話なのか、あるいは個人レベルの話なのかっていう部分で、たぶんいろいろ別れるとは思いますが、僕自身がいろいろと難しいなと考えているところです。

もうひとつ、すごい方法論的保守主義的なことを言ってしまうんですけど、たとえば社会学のなかで ANT をどう考えるかといったときに、難波さんに提示していただいたように、分析的な理論で、ethnographic に practical なツールであるっていうところは、たぶん都市研究のなかでもある程度合意はある。それは、今までの大きな構造理論とか資本のフローっていうところでは見られなかった複雑な関係性や、ある種の因果的な非決定性みたいなものを明らかにするような可能性があるっていうところは、僕も同意するんです。けれども、社会学の場合、厄介な

² Graham, Stephen, 2010, *Cities under Siege: The New Military Urbanism*, London: Verso.

³ Vine, David, 2015, *Base Nation: How U.S. Military Bases Abroad Harm America and the World*, New York: Metropolitan Books. (=2016, 西村金一監訳・市中芳江・露久保由美子・手嶋由美子訳『米軍基地がやってきたこと』原書房.)

⁴ Brenner, Neil, David J. Madden and David Wachsmuth, 2011, "Assemblage Urbanism and the Challenges of Critical Urban Theory," *City*, 15: 225-240.

のは、じゃあこれを、たとえば計量研究でどうするかとか、たとえば、今 SNS ネットワークとかすごい流行りだと思んですけど、ソーシャル・ネットワーク分析って基本的には Latour たちが言うようなネットワークとはかなり違う系譜がずっと 100 年くらいあって、方法論的な水準でどうするかというのがある。ネットワークは分かったと。ネットワーク的なもののフローとかノードがどうかとか、そういう話は分かったと。それをどういうふうにも実証するかといったときに、どういうデータから明らかにするのかっていう段階で、非常に難しくなるなって考えています。批判理論とか新都市社会学の主要な批判って、たぶんその辺にあって、ANT や assemblage 学派の言いたいことは分かるし、理論も非常に明晰な部分はあるけれども、しかし、それを方法論的な部分に落とし込むときに、じゃあ、どういうふうなレベルの何を対象にすればいいのかっていうところが明らかではないんじゃないのっていうところが、難しいとこだなと思っています。そこがまだ課題なんですけど、ethnographic な方法論とは異なるレベルで、どういうふうな実証と理論の往復がありうるのかなっていうのが、なんか自分の個人的な悩みを打ち明けただけなんですけど、今の時点ではこの 2 つが気になるところです。何かアイデアがあれば、教えていただけたらなと思います。ありがとうございます。

植田: ありがとうございます。残り時間が限られているので、フロアにも開きたいと思んですけど、その前にひとつだけ。難波さんがさっきおっしゃっていた、科学的な知識への信頼は揺らいでないんじゃないかっていうのは、本当にそのとおりで、我々もそこはたぶん共有している話なんです。近代的な日常生活を送ってきた人たちがインフラに対して持っていた信頼性の感覚は大きく揺らいだかもしれないけれども、でも、それを梃子にして、近代的な知識とか科学知とか、もっと言うと工学的な知ですよね、それが圧倒的な力を持ち始めているんだと。震災の後、むしろ強まっているとさえいえる。だからこそ、そこを問題化したっていうところがあります。三浦さんがさっきおっしゃってくださったように、植田の問題関心が知にあるっていうのは、そこのところとも関係していて、知識とか専門知とか、特に近代社会において工学的な知が持ってきた力の特権性みたいなものを、一度ちゃんと理論的に位置付けたいってところが、僕の場合、基本的な問題関心としてあります。

答えなければならぬことはまだまだいっぱいあるんですけど、時間が迫っていますので、いったんここでフロアに開きたいと思います。もし何かさらにコメントとか、ご質問とかございましたら、できればお名前をいただいたうえで出していただければと思います。よろしくお願ひします。いかがでしょうか。